建築家 B.アンマナーティのパドヴァ滞在期における成果と その展開に関する考察

A STUDY ON B. AMMANNATI'S RESULT AS AN ARCHITECT IN PADUA AND ITS EVOLUTION

岩谷 洋子*
Yoko IWAYA

The career of Architect Bartolomeo Ammannati consists of 4 stages: the youth when he studied theory and technic cooperating with great architects in Renaissance cities, the sojourn in Padua when his architectural activity was put into practice under the patronage of Mantova Benavides, the second half of his life under Pope and the Medici, and dedication to the Jesuit since 1572.

It is considered that Ammannati's 4 years activity in Padua with his previously acquired knowledges was his foundation as an architect. Then he extended the sphere of his activity through this experience, and developed his architectural conception and technic.

Keywords : Italy, Renaissance, Mannerism, Ammannati, Benavides, Padua

イタリア、ルネサンス、マニエリスム、アンマナーティ、ベナヴィデス、パドヴァ

1. はじめに

16世紀イタリアの彫刻家であり建築家であるバルトロメオ・アンマナーティ (Bartolomeo Ammannati: 1511-92年) は、ヴァザーリやブオンタレンティ、ジャンボローニャとならんで、フィレンツェのいわゆるマニエリスム期を代表する美術家である。

アンマナーティは、フィレンツェにおいて彫刻家として創作活動を開始し、それ以来、ヴェネツィアやパドヴァ、ウルビーノなどにも滞在して彫刻の仕事をしていた。

やがてアンマナーティは、その生涯の後半に相当する1550年以降においては建築家としても活動し、ローマでは法王ユリウス三世 (在位: 1550-55年) に、フィレンツェではメディチ家のコジモ一世やフランチェスコ一世らに仕えて、ヴィッラ・ジュリアやパラッツォ・ピッティなどを計画した。

では、それまで彫刻を生業としていたアンマナーティは、いかなる過程を経て、このような大規模な建造物の造営に関わる建築家となるにいたったのであろうか。

若年の頃に、多くの美術家を受け入れ輩出した都市を巡り、そこで活躍する建築家と交流するようになり、自らもまた建築家としての可能性を考えるようになったのではないかと考えられる。当時は、画家や彫刻家が建築家としての役割を果たすこともあったから、彫刻家として

活動していたアンマナーティもまた、建築に関しても多くの知識を身につけ、周囲からの創造的な刺激を受けつつ建築家としての方向性を探っていたのではないかと考えられる。

とくに注目すべきは、パドヴァに滞在した時期であり、そこでアンマナーティはマルコ・マントヴァ・ベナヴィデス (Marco Mantova Benavides: 1489-1582年) というパトロンを得て、当時は建築家の役割であった凱旋門や庭園の制作などの仕事に、実際にたずさわる事ができた。

アンマナーティは、パドヴァで建築に関する既得の知識を単独で実作に活かす機会に恵まれ、そうした実歴があったからこそ、後のローマにおいて即座に、ヴィッラ・ジュリアやパラッツォ・フィレンツェの計画を受け持つことができたと考えられる。

そこで本論においては、まず、パドヴァに滞在する以前に、アンマナーティが建築に関していかなる知識を習得していたかを探るために、それぞれの都市に滞在した年代を可能な限り詳細に設定したうえで、その仕事内容や交流をもった建築家などについて考察する。

次に、そうした経歴をもとに、パドヴァのマントヴァ・ベナヴィデスのもとで、アンマナーティが建築に関してどのような制作活動を行ったか、またそれは後のアンマナーティの建築にいかなる可能性を導くものであったかを考察する。

* 東京理科大学工学部建築学科 助手・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Science Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

2. 建築家としてのアンマナーティの経歴

2-1. フィレンツェ滞在：1511-1527 年

アンマナーティは、1511年にフィレンツェ近郊のセッティニャーノに生まれ、12歳の頃に彫刻家バッチオ・バンディネリ（Baccio Bandinelli: 1488-1560）の工房に入った¹⁾。

そこで彫刻家として創作活動を開始したアンマナーティは、バンディネリ自身が語るように、その優秀な働き手であったが²⁾、後にはバンディネリと反目し合うようになる。

この時期に、アンマナーティはバンディネリから、他の2人の弟子たちとともにミケランジェロのもとに遣いに出され、そこで働きながら学ぶことになった³⁾。その頃ミケランジェロが制作していたのは、メディチ家の新聖具室である。

2-2. ヴェネツィア滞在：1527-31 年

1527年、フィレンツェに反メディチ派が蜂起した。そのため、アンマナーティはフィレンツェから脱出し、その後ヴェネツィアに向かい、建築家サンソヴィーノ（Jacopo Tatti Sansovino: 1486-1570）の指揮のもとで彫刻の仕事にたずさわった。サンソヴィーノは、1527年のサッコ・ディ・ローマの難を逃れてヴェネツィアに移ってからは同国の主任建築家を務め、サン・マルコ聖堂の修復や、ゼッカ、パラッツォ・コルネルの計画を担当していた。

一方、アンマナーティがパッラーディオと交流して多くの影響を受ける機会があるとすれば、パッラーディオは当時はまだ石工職人であったから⁴⁾、それはさらに後のことで、アンマナーティが二回目にヴェネツィアやパドヴァに滞在していた頃のことである。

また、この時期にセルリオと知り合ったかどうかについては明らかではないが、アンマナーティはその建築書を参照していて、そこから引用することもあった⁵⁾。

ヴェネツィア滞在后は、パドヴァに一時滞在したことになっていて、パラッツォ・ストロツィにおける「ネプチューン」像を制作したと考えられている⁶⁾。

パドヴァでは当時、建築家ジョヴァンニ・マリア・ファルコネット（Giovanni Maria Falconetto: 1468-1535）が活躍し、ロジッア・コルナロやオデーオなど、古典的な形式にもとづいて建築を設計していた。

2-3. フィレンツェ滞在：1531-1537 年

アンマナーティが初めてヴェネツィア・パドヴァに滞在したのは、1533年まで、あるいは1536年頃までと考えられているが⁷⁾、次に述べるように、遅くとも1531年11月末までにはフィレンツェに戻っていたと考えられる。

フィレンツェに戻ってからは、アンマナーティは再びミケランジェロの作品を熱心に研究していた。ところが、その熱意のあまりに、ナンニ・ディ・パチオ・ピジオと一緒にミケランジェロのスケッチを盗み出してしまうという騒動を起こしてしまった⁸⁾。

それらのスケッチが、ミケランジェロが弟子のミーニに贈ったものであるとするならば⁹⁾、この騒ぎが起きたのは、ミーニがそれを携えてフランスに発った1531年11月末以前のことになる¹⁰⁾。すなわち、それまでにはアンマナーティはフィレンツェに戻っていたと考えられる¹¹⁾。

さて、メディチ家新聖具室の研究に勤しむうちに、アンマナーティはバッティスタ・フランコ（Battista Franco: 1498-1561）およ

びジロラモ・ジェンガ（Girolamo Genga: 1472-1551）と知り合いになり、親交を深めていった¹²⁾。バッティスタ・フランコは当時フィレンツェで、1536年に行われる神聖ローマ帝国皇帝の娘マルグリータの入市式のための飾り付けの仕事をしていた¹³⁾。

一方、ジェンガと知り合いになったことで、アンマナーティはその口添えによって、ウルビーノ大公のために彫刻「レダ」を制作して贈ることができた¹⁴⁾。

この他にも、ピサのドゥオーモの聖マルティーリの墓廟のルネットのレリーフや、ナポリの詩人ヤコポ・サンナザーロの墓廟を制作した¹⁵⁾。

2-4. ウルビーノ滞在：1537 年-1539 年頃

アンマナーティはジェンガとともに、ウルビーノでフランチェスコ・マリア大公のために仕事をする事になり¹⁶⁾、1538年10月の大公の死までそこに留まって、ウルビーノから海側に向かった場所にあるベザロのヴィッラ・インペリアーレにおける「ストウッコ」の仕事や、大公の墓廟制作の仕事をした¹⁷⁾。

ウルビーノをあとにして後も、ジェンガとの親交は続いていて、フィレンツェでは、今度はアンマナーティがヴァザーリとともに、ジェンガの息子バルトロメオ・ジェンガの世話をした¹⁸⁾。それは、1518年生まれのバルトロメオ・ジェンガが20歳のとき、すなわち1538年のことになるが、ウルビーノ大公の死が同年の10月であったことを考え合わせると、アンマナーティは1539年頃にフィレンツェに戻っていたことになる。

2-5. フィレンツェ滞在：1539 年頃-1540 年

1539年のフィレンツェでは、メディチ家のコジモ一世とエレオノーラの婚礼の祝祭が催された¹⁹⁾。これは、アンマナーティが遭遇した二度目のメディチ家の婚礼の祝祭である。

この時期アンマナーティは、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂におさめられるローマの貴族マリオ・ナリの墓廟の制作にとりかかった²⁰⁾。マリオ・ナリは決闘で勝利したが、後に謀反人によって殺害され、1539年10月に埋葬された。墓廟の制作が依頼されたのは、その少し後のことである²¹⁾。

ところが、当時は法王の大勅書によって決闘は厳しく戒められていたから、ナリの墓廟は重大な問題を孕んでいた²²⁾。それゆえ、アンマナーティがその彫像を、たとえ決闘ではなく信仰による「勝利」として意味を転換し、キリスト教的美徳の象徴として表現したにしても、完成の後も墓廟が除幕されることはなかった²³⁾。

さらには、バンディネリから競争相手とみなされ嫌がらせの行為を受けたこともあって²⁴⁾、アンマナーティはフィレンツェでは活動しにくくなり、不満を抱いていた。ちょうどほぼ同時期に、フィレンツェを訪れたサンソヴィーノからヴェネツィアでの仕事を依頼されたために²⁵⁾、それを受けてヴェネツィアに発った。

2-6. ヴェネツィア滞在：1541-1542 年

ヴェネツィアでアンマナーティは、サンソヴィーノが設計を担当するサン・マルコ広場のリブレリアにおいて、そのスバンドレルの浮彫り装飾、および「ネプチューン」の彫像を担当し²⁶⁾、仕事に対する報酬を1541年あるいは1542年に受けている²⁷⁾。

またパドヴァ近郊のポンテカサーレのヴィッラ・ガルツォーニにおいては、サンソヴィーノの設計のもとで、アンマナーティは暖炉の柱像を制作した²⁸⁾。

その後、1543年頃には、アンマナーティは再度ウルビーノに赴き、未完のウルビーノ大公の墓廟を完成させたと考えられている²⁹⁾。

2-7. バドヴァ、ヴィチェンツァ滞在：1544-48年

アンマナーティは2度目のバドヴァ滞在期には³⁰⁾、マルコ・マントヴァ・ベナヴィデスという当時の著名な法律家をパトロンとする機会に恵まれ³¹⁾、バラツツォ・ベナヴィデスにおける凱旋門、円形劇場、彫像「ヘラクレス」およびサン・エレミターニ聖堂におけるマルコ・マントヴァ・ベナヴィデスの墓廟を制作した³²⁾。

また、バドヴァのバラツツォ・カピタノにおいて、ジョヴァンナンドレア・デッランギッラーラが率いるコメディアの劇団が上演するにあたっては、その舞台背景や装飾の制作を担当した³³⁾。

さらに、アンマナーティは、バドヴァ滞在期間に断続的にヴィチェンツァにも滞り、ジロラモ・グアルド伯爵の庭園に噴水のコンプレックスを制作した³⁴⁾。

ジロラモ・グアルドはバドヴァで法律を学んだ知識人で、さらにその甥のジュゼッペ・グアルドがマントヴァ・ベナヴィデスのもとで法律を学んだという関係もあって、アンマナーティはマントヴァ・ベナヴィデスを通してヴィチェンツァのジロラモ・グアルドからも仕事を依頼され³⁵⁾、バドヴァからは30kmほど離れたヴィチェンツァにも出かけていた。

2-8. ローマ滞在：1548-1555年

アンマナーティは、法王パウルス三世のもとで働くことができるよう、マントヴァ・ベナヴィデスから枢機卿に宛てて3通の推薦状を書いてもらい、それを携えて1548年にローマに向かった³⁶⁾。1550年には、詩人ラウラ・バッティブェッリと結婚するために、一時的にウルビーノに滞在した³⁷⁾。

さて、アンマナーティはローマではまず、バドヴァで知り合ったデッランギッラーラの一座の舞台装飾を担当し³⁸⁾、フィレンツェで懇意にしていたバッティスタ・フランコと共作した。

1549年の法王パウルス三世の死後もアンマナーティはローマに留まり、翌年には法王に即位したユリウス三世の戴冠式の飾り付けに取りかかった³⁹⁾。

さらに、サン・ピエトロ・イン・モンテリオに設置される法王の祖父と叔父のための墓廟の制作にあたっては、監督を務めるミケランジェロの希望にしたがい、アンマナーティに仕事が依頼され、そこでヴァザーリと共に制作した⁴⁰⁾。

またヴィッラ・ジュリアの造営においても、その監督はミケランジェロであり、館部分をヴィニョーラが、庭園部分をアンマナーティとヴァザーリがそれぞれ担当した⁴¹⁾。

2-9. フィレンツェ滞在：1555-1592年

1555年の法王ユリウス三世の死により、アンマナーティは新たに仕事を探さねばならず、フィレンツェにいたヴァザーリを頼り、その推薦によってコジモ一世の知遇を得た⁴²⁾。こうしてメディチ家に仕えるようになってからは、終生フィレンツェに留まった。

アンマナーティは、フィレンツェにおいてもミケランジェロの監督下で、ヴァザーリとともにバラツツォ・ヴェッキオの大広間の改築にたずさわることになり⁴³⁾、大広間南面の壁とそこに置かれる噴水の制作を担当した⁴⁴⁾。

さらに、メディチ家のために、アンマナーティは、バラツツォ・ピッティの中庭の造営やコジモ一世のシエナの入市式のための飾り

付け⁴⁵⁾、フランチェスコ一世の婚礼の祝祭の飾り付け⁴⁶⁾、リヴォルノの港湾計画⁴⁷⁾、サンタ・トリニタ橋の再建⁴⁸⁾など、建築家として多くの仕事に関わった。

また、ヴァザーリとの交友関係も続けられていて、1562年にヴァザーリの主導で創立されたアカデミア・デル・ディゼーニョにも入会している⁴⁹⁾。

ところが、1572年からは、アンマナーティはイエズス会と関わりをもつようになり⁵⁰⁾、キリスト教の道徳観から、それまでの自己の彫刻作品に対して深く改悔し⁵¹⁾、彫刻家としての仕事を拒絶するようになった⁵²⁾。それ以降アンマナーティは、建築家として、とくにイエズス会のために自らすすんで貢献しようとした⁵³⁾。

一方、ルッカの市庁舎バラツツォ・デッラ・シニョーリアを計画するなど、建築家としては世俗の建築にもたずさわっていた⁵⁴⁾。

以上のように年代設定をした結果、建築家としてのアンマナーティの経歴は、文芸の興隆した都市を巡って著名な建築家と共に制作し、建築の理論や技術を学んだ若年の頃、マントヴァ・ベナヴィデスというパトロンのもとで単独で実作にあたった時期、ローマおよびフィレンツェで法王やメディチ家に仕えた生涯の後半に相当する時期、宗教的に改悔して、イエズス会に献身しようとした1572年以降、という4つの段階からなるといえる。

3. バドヴァ滞在前

3-1. ミケランジェロの建築の研究

彫刻家として創作活動を開始したアンマナーティは、若年の頃には建築家として実作を残すことはなかったが、サンソヴィーノやミケランジェロ、ジェンガなどの著名な建築家のもとで働き、またファルコネットの建築についても学ぶ機会があったことが確かめられた。さらには、メディチ家の婚礼の祝祭のために、親しく交流していた友人のバッティスタ・フランコやヴァザーリらが街に壮麗な飾り付けの仕事をしている現場にも居合わせて、その様子を身近で観察していたことが分かった。

とくに、アンマナーティが建築を学ぶにあたって、第一に研究していたのは、ミケランジェロの建築であるといえる。アンマナーティは徒弟時代からミケランジェロのもとで働きながら学んでいて、フィレンツェに滞在していた時期には、ミケランジェロが制作中であったメディチ家の新聖具室について⁵⁵⁾、仲間と連れだってその研究に勤しみ、前述したように、その熱意が高じて騒動を引き起こしたこともあった。アンマナーティはその制作現場において、デザインのみならず、建設技術や工事の過程にいたるまでを習得したものと考えられる。

ところで、ヴァザーリは、ミケランジェロが新聖具室のクーポラを架ける際に、自らの建築はブルネッレスキの建築よりも「いっそう優れたもの」ではなく、それを多様化させたものであると語ったことを伝えている⁵⁶⁾。

ヴァザーリは、チマブエ、ジョットーに始まるイタリア美術の復興の歴史の中で、ミケランジェロによって古代をはるかに凌駕する「最高の完成の時」に至ったという歴史観をもって、常にミケランジェロの建築を高く評価していた。ヴァザーリは、メディチ家の新聖具室の制作において、ミケランジェロがブルネッレスキの建築の多様化によって新たな手法を創造したと認識していたのである。

図1 アンマナーティによる要塞建築のスケッチ Bartolomeo Ammannati, in Pacioli Luca, della proporzione ecc., Firenze, Biblioteca Riccardiana, Edizione Faè n. 120, c. 65.

写真1 アンマナーティ、パラッツォ・ベナヴィデスの凱旋門、パドヴァ、1544-48年（出典：Kiene, Michael, Bartolomeo Ammannati, Milano, Electa, 1995.）

写真2 アンマナーティ、ヴィッラ・ジュリアの第一の中庭のポルティコ、ローマ、1552-53年（筆者撮影 1994年）
開口部は中央に1つだけであったが、1900年頃の修復によって3つ設けられた。

ヴァザーリの身近な友人であるアンマナーティもまた、新聖具室の制作現場に居合わせて、ミケランジェロの建築とフィレンツェに残されたブルネッレスキの建築とを比較しつつ、古代以来の建築の歴史の流れの中で、自己のとるべき方向性を模索していたのではないかと考えられる。

実際、ブルネッレスキが設計したオスベダーレ・デッリ・インノチェンティを写したような慈善施設の平面図を描いていて⁵⁷⁾、それによってもアンマナーティがいかにブルネッレスキの建築を意識し観察していたかが窺われる。

3・2. 要塞建築

この他に、アンマナーティがミケランジェロから学んだこととしては、要塞建築があげられる。要塞や都市壁の構築は、当時の建築家にとっては、都市防備のための重要な実務であった。

アンマナーティのノートの中には、ミケランジェロが1529年の神聖ローマ帝国皇帝軍によるフィレンツェ包囲戦の際にフィレンツェの共和派に荷担し、サン・ミニアートに築いた要塞について書き留められている⁵⁸⁾。ミケランジェロによる要塞を目のあたりにして、メモをとって研究していたのである。

しかしその一方で、ミケランジェロのスケッチにみられる有機的な表現には関心を示さなかったようで、そのノートには、[図1]のように、かわりにサンマリノの要塞建築に関する著作中の図版⁵⁹⁾から写したとみられる、要塞建築の構築理論を学んで書き留めた数々のスケッチが残されている⁶⁰⁾。

4. バドヴァ滞在期の制作活動とその後の展開

4・1. パラッツォ・ベナヴィデスの凱旋門

先述したように、1548年から4年間という短い期間ではあるが、バドヴァではマントヴァ・ベナヴィデスがアンマナーティのパトロンとなった⁶¹⁾。

マントヴァ・ベナヴィデスは、1545年に神聖ローマ帝国皇帝カール五世から騎士の称号を授与され、同年ヴェネツィア大使にも任命された⁶²⁾。このような名誉を記念してつくられたのが、パラッツォ・ベナヴィデスにおける凱旋門[写真1]である。

アンマナーティが制作したこの凱旋門は、デザインとしては、パラッツォ・ベナヴィデスの中庭において古代の趣を演出し、受けた栄誉を強く印象づけるように、記念性が表現されている。また、凱旋門を隔てた中庭の向こう側には庭園があって、凱旋門は、中庭と庭園とを隔てつつ結びつける門としても実際に機能している。

さて、パラッツォ・ベナヴィデスの入口から中庭に入ると、正面突き当たりに、この凱旋門が視線を集めるように配置され⁶³⁾、中庭に置かれたアンマナーティ作の彫像「ヘラクレス」の身体の動きによっても、中庭の入口から凱旋門までを視覚的に結びつける効果が高められている⁶³⁾。

アンマナーティはこの凱旋門によって、その手前にある中庭と、背後にある庭園とを遮断すると同時に、門の中央にただ一つの開口部を設けることで、パラッツォの入口、中庭から凱旋門、庭園までが一つの軸線上で見通されるようにして、それらを視覚的に結びつけようとしたと考えられる。

このような一枚の隔壁によって空間を分断したうえで、それらを視覚的に貫く軸線を通すことによって連結するやり方は、後のロー

マ、フィレンツェのヴィッラやパラッツォにおいても、アンマナーティが好んで用いた手法である。そうした手法が設計に活かされた例としてはまず、ローマのヴィッラ・ジュリアの庭園があげられる。

その庭園のニンファエウムは、はじめ館からは独立した形で計画されていたが⁶⁴⁾、後にヴァザーリのもとで側壁が制作されて館と繋がられた⁶⁵⁾。アンマナーティは、館の側とニンファエウムのある側とを分けるようにそこにポルティコ〔写真2〕を配置し、庭園全体を、館とポルティコに挟まれた第一の中庭と、ポルティコからニンファエウム、ロτζアにいたる第二の中庭という構成とした。

こうして分断された庭園に、ポルティコ中央の開開口部を通して、館側から第一の中庭、第二の中庭のロτζア、さらにその先にある庭園の突き当たりの壁面のニッチに置かれた彫像までを見通すように、一直線に軸線が貫かれた。

アンマナーティは、別々に構想された館の側とニンファエウムの側とをポルティコによって二分したうえで、視覚的には見通しの軸線を通してそれらを連結し、全体の構成をまとめている。

またローマでは、パラッツォ・フィレンツェの計画においてもロτζアが設けられていて、それによって中庭と庭園は分け隔てられ、かつ視覚的に連結されている。同時に、ここでは不整形な敷地から生じる平面の歪みも調整された⁶⁶⁾。

ところで、アンマナーティが描いた図面の中には、ミケランジェロが計画したパラッツォ・ファルネーゼの平面の模写が残されている〔図2〕⁶⁷⁾。この計画は、法王が館から対岸にある館や庭園に行けるようテヴェレ川に橋を架け、視覚的にもカンポ・ディ・フィオーリ広場から館の入口、中庭、庭園を貫き、さらにジュリア通りから橋を渡った対岸まで、一直線に軸線を通すという壮大な構想によるものであった⁶⁸⁾。空間の見通しの効果に関心をもっていたアンマナーティは、これを実見し、パラッツォの理想として捉えて模写したものと考えられる。

さらに、フィレンツェに移ってからは、パラッツォの計画において、構成上同様な手法を用いようとしたことが認められる。例としては、パラッツォ・ラミレス・モンタルヴォやパラッツォ・モンドラゴネの計画が挙げられるが、そうした意図が最も明確に読み取れるのは、パラッツォ・ジュニにおいてである。この計画では、アンマナーティは既存部分の制約を受けることが少なく、模型の段階から自らの考えを形にしていけることができたからである⁶⁹⁾。

パラッツォ・ジュニにおいては、全体的な構成として、通りに面した入口から、ヴォールトが架けられた通路、中庭、さらにその先にある庭園までのいくつかの異なる空間が、一つの軸線を通すことによって視覚的に連結されている。ミケランジェロによるパラッツォ・ファルネーゼのように、パラッツォは庭園と一体に扱われ、見通しの効果が考えられているのである。このことは、計画案と考えられる「チッタ・イデアレ」の3418番の図面〔図3〕をみても明らかで、そこではパラッツォの背後に庭が広がり、木々が立ち並んでいて、見通しの軸線がいっそう強調されている⁷⁰⁾。

以上のように、パドヴァのマントヴァ・ベナヴィデスの凱旋門の計画にはじまる見通しの効果をはかる手法は、ローマではヴィッラ・ジュリアという大規模な庭園において応用され、さらにフィレンツェのパラッツォの計画では、周囲の環境と一体化させて考えられている。

4-2. パラッツォ・ベナヴィデスの庭園およびヴィッラ・グアルドの庭園

アンマナーティはパラッツォ・ベナヴィデスの庭園に、円形劇場を制作した⁷¹⁾。またヴィチエンツァにおいても、郊外にあるブステルラのジロラモ・グアルドの庭園には、建築的なコンプレックスと

図2 アンマナーティ、パラッツォ・ファルネーゼの模写
Bartolom.° Ammannati, Fabbriche di sua invenzione
(Città ideale), Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi,
n° 3450A.

図3 アンマナーティ、パラッツォ・ジュニの計画案
Bartolom.° Ammannati, Fabbriche di sua invenzione
(Città ideale), Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi,
n° 3418A.

して大規模な噴水を制作した。現在、それらの様子は史料によってのみ窺うことができる。ジロラモ・グアルドの噴水に関しては、その曾孫で同名のジロラモ・グアルドによって著された、グアルド家と関わり深い画家・彫刻家・建築家についての著述があり⁷²⁾、これに合わせて、後の時代の19世紀後半のヴィチェンツァの案内記や、グアルド家に関する記述も参考にすることができる⁷³⁾。

パラッツォ・ベナヴィデスとヴィッラ・グアルドについては、まず、どちらも市の中心部からは隔たりをもった場所にあつて、都市とは密接に連絡を保ちながらも、その雑踏や喧噪からは離れて自然に親しんだ生活をおくるヴィッラとしての機能を併せ持つ、という共通点があげられる。これは、後にアンマナーティが手がけたローマのヴィッラ・ジュリアやフィレンツェのパラッツォ・ピッティにも共通する点であり、法王やメディチ家は、市街からは一定の距離をおいた場所にその拠点を求める一方で、市の中心部とも緊密な関わりを保とうとしていた。

また、ヴィッラ・グアルドの庭園の噴水のコンプレックスには、階段を上って眺望をたのしむためのロジgiaが設けられている。このような階段により高低差をつけた構成の他にも、グロッタの噴水、ロジgiaの鳥かごやストウツコの彫像などは⁷⁴⁾、ローマのヴィッラ・ジュリアにおける第二の中庭（ロジgia、ニンファエウム）と類似した点が多く、アンマナーティはこのバドヴァ、ヴィチェンツァ滞在期間にはすでに、庭園の計画としてはヴィッラ・ジュリアに近い構想を抱いていたと考えられる。

一方、パラッツォ・ベナヴィデスの円形劇場は小規模なもので、7つのニッチによって半円の劇場が分割され、それぞれのニッチにはテラコッタでつくられた7つの遊星の神々の彫像が配置されていた⁷⁵⁾。アンマナーティはパラッツォ・ピッティの庭園においても、ウーテンズの描いたルネットにみるように⁷⁶⁾、円形劇場をつくった。しかし、バドヴァのパラッツォ・ベナヴィデスの円形劇場が何よりもまず、マントヴァ・ベナヴィデスが収集した古代の美術品などをならべてたのしむ場所であるのに対し、フィレンツェのパラッツォ・ピッティの円形劇場は、当時の権力者の館として、そこで催されるさまざまな祝祭に対応する必要があつた⁷⁷⁾。

4-3. コメディアの舞台装置

舞台装置や祝祭の飾り付けは一時的なもので、そのまま後代に残されることはないが、当時の建築家にとっては重要な仕事であつた。

アンマナーティのノートを見ると、そこには1545年7月24日にバドヴァのパラッツォ・カピタノにおいて、ジョヴァンアンドレア・デラングイッラーラのコメディア上演のために、舞台背景を制作したことが書きとめられている⁷⁸⁾。セルリオの建築書や友人のジェンガから学んでいたパースペクティヴの理論が、このときはじめて実用に活されたのである。

ローマに移ってからでもデラングイッラーラとの関係は続いていて、デラングイッラーラがパラッツォ・コロナでコメディアを上演する際に、アンマナーティはパッティスタ・フランコと共同して、舞台装飾に関わる一座所属の画家や彫刻家、建築家を統率する監督として舞台美術を担当し、ヴァザーリが称賛するような成果をおさめることができた⁷⁹⁾。こうして舞台背景の仕事を成功させたアンマナーティは、法王やメディチ家に仕えて、祝祭時の装飾の制作を担当するようになった。

まずローマでは、ユリウス三世が法王に即位すると、アンマナーティは即座にカンピドリオ広場における戴冠式の飾り付けを担当することになった。後にフィレンツェに帰還すると、さっそくメディチ家のコジモ一世のために、パラッツォ・ヴェッキオの大広間南面の噴水の制作した⁸⁰⁾。それは、フランチェスコ一世の婚礼の祝祭において、この大広間でコメディアが上演される際には⁸¹⁾、仮設の舞台と合わせて重要な飾り付けであつたと考えられる。

さらに、パラッツォ・ピッティの中庭と庭園の計画は、祝祭によって権威と栄光をフィレンツェに誇示しようとするメディチ家が行うさまざまな催しに対応するものであつた。中庭や庭園側の館のファサードは、祝祭時には舞台背景となるため、演出効果を高めるように考慮されねばならなかつた。そこで、庭園には円形劇場が設けられ、館はオペリスクが立つ付近から眺めると、実際よりも1層を減じた2層構成であるかのように見せかけてファサードがつくられている⁸²⁾。アンマナーティは、館と庭園の両方を計画してきたため、館からは庭園の眺めを、また庭園からは館の眺めを配慮して、全体の構成を整えることができたのである。

また、当時トスカーナに領土拡大を目論んでいたコジモ一世は、1557年に攻略したシエナに対し、メディチ家による支配を示そうとして入市式を行った。アンマナーティはそれより数ヶ月早くシエナに移り、準備にとりかかった⁸³⁾。このとき、フィレンツェに通じるシエナの北の市門であるカモッリア門の周辺には、凱旋門や記念柱が建てられた〔写真3〕⁸⁴⁾。

以上のように、アンマナーティはコメディアの舞台背景において、それまでに積み重ねてきた理論を形にして、結果として高い評価を受けることができ、それ以来、式典や祝祭の飾り付けなど、権力者のもとで建築家として祝祭の仕事に関わるようになった。

写真3 ヴォルテッラーノ、「コジモ一世のシエナの入市式」（フレスコ画）、ヴィッラ・ペトラリア、1636-48年（筆者撮影 1994年）

5. 結語

建築家としてのアンマナーティの経歴は、1) 1511-1544年: フィレンツェ、ウルビーノ、ヴェネツィアなどに移動し、ミケランジェロやジェンガ、サンソヴィーノら著名な建築家と共に制作するなかで、建築の理論や技術を学んだ若年期、2) 1544年-1548年: 単独で実際に凱旋門や庭園などを制作したパドヴァ滞在期、3) 1550年-1572年: 法王やメディチ家に仕えて大規模なパラッツォやヴィッラの造営にたずさわった生涯の後半期、その中でもとくに1572年以降は、4) 宗教的に改倭し、建築の仕事に専念してイエズス会に献身しようとした時期、という4つの段階からなることが確かめられた。

このような経歴の中で、パドヴァに滞在した4年間は、アンマナーティにとって、建築に関する既得の知識をもとに、実際に建築作品を創造した自己確立期に相当する。

アンマナーティはその後、そうしたパドヴァでの実歴をもとに、建築家としてパラッツォやヴィッラ、舞台装置や祝祭の飾り付けなどを手がけて幅広く活動し、軸線を通すことにより見通しの効果をはかり、いくつかの空間を繋げる方法にみるように、建築に対する自己の構想や手法をよりいっそう発展させていったといえる。

注

1) ヴァザーリの記述には誤りもあるが、ヴァザーリはアンマナーティとは同世代であつたばかりでなく、生涯を通じて親しい関係にあつたため、ここではそれに従っている。また、アンマナーティの生涯についての記述については、ヴァザーリはボルギーニに任せようとしている。

Vasari, Giorgio, "Iacopo Sansovino", in *Le vite de' più eccellenti pittori scultori e architettori* (1568), a cura di Gaetano Milanesi (1^a ed. 1906), Firenze, G. C. Sansoni Editore, vol. VII, 1981, p. 522.

ボルギーニはアンマナーティと同時代であるから、ここではヴァザーリが述べるように、アンマナーティの経歴はボルギーニの記述をもとに考察する。Borghini, Raffaello, *Il Riposo* (Firenze, 1584), a cura di Mario Rosci, Milano, Edizioni Labor, 1967. さらに後の時代のものとしては、バルディヌッチ、およびバリオーネ、ミルツィアなどの記述を参照した。

Baldinucci, Filippo, *Notizie de' professori del disegno da Cimabue in qua*, Firenze, 1688; Baglione, Giovanni, *Le vite de' pittori scultori et architetti dal Pontificato di Gregorio XIII. fino a tutto quello d'Urbano VIII* (Roma, 1649), a cura di C. Gradara Pesci, Velletri, Arnaldo Forni Editore, 1924; Milizia, Francesco, *Memorie degli architetti antichi e moderni*, Venezia, 1785. さらに、フォッシ、キネーをはじめとする研究論文を照らし合わせて考察した。

2) Bandinelli, Baccio, "Memoriale", in *Scritti d'arte del Cinquecento*, vol. VI, a cura di Paola Barocchi, (1^a ed. Milano-Napoli, Riccardo Riccardi Editore, 1971-73), Torino, Giulio Einaudi Editore, 1979, p. 1385.

3) B. Bandinelli, *ibidem*, p. 1396.

4) 石工のパッラーディオは、1538年にトリッシーノと出会って後に建築家に転身した。

5) Mazzino Fossi, *La Città—Appunti per un trattato di Bartolomeo Ammannati*, Roma, Officina Edizioni, 1970, p. 427.

6) Kinney, Peter, *Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati* (For the Degree of Doctor of Philosophy at New York University, 1974), New York & London, Garland Publishing, 1976, pp. 11-17.

7) P. Kinney, *Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, *ibidem*, pp. 9-10. Kiene Michael, *Bartolomeo Ammannati*, Milano, Electa, 1995, p. 9.

8) G. Vasari, "Michelagnolo Buonarroti", in *Le vite...*, op. cit. (1568), VII, p. 227.

9) ミケランジェロは、弟子のミーニが結婚させねばならない2人の女きょうだいをかかえている事情を知ると、「レダ」をはじめ多くの素描をミーニに与えた。「レダ」についてはヴァザーリが称賛し、アンマナーティもまたそれをもとに一つの彫刻作品を制作した。G. Vasari, *ibidem*, p. 202.

10) G. Milanesi, "Commentario alla vita di Michelangiolo Buonarroti", in *Le vite...*, *ibidem*, (1568), VII, p. 335.

11) ミケランジェロはサン・ミニアートの防壁工事の司令官に任命され、フィレンツェ政府の命を受けて1529年7月末にフェッラーラに派遣された。ミケランジェロが「レダ」の制作にとりかかったのは、フェッラーラから帰還後で、フェッラーラ大公アルフォンソのもてなしに対する返礼のためであった。したがって、アンマナーティが「レダ」を含むミケランジェロのスケッチを盗んだのは、1529年後半から1531年末までの間のある時点である。G. Vasari, "Michelagnolo Buonarroti", in *Le vite...*, *ibidem* (1568), VII, pp. 194-5.

12) G. Vasari, "Battista Franco", in *Le vite...*, *ibidem* (1568), VI, p. 574.

13) 1536年には、マルゲリータの婚礼の前に、アフリカからメッシーナ、ローマ、次いでシエナ、フィレンツェと北上してきた神聖ローマ帝国皇帝カール五世自身の入式式が行われた。G. Vasari, "Domenico Beccafumi", in *Le vite...*, *ibidem* (1568), V, p. 645. 壮麗な入式式を準備したヴァザーリは、それ以前の1529年にも、ポローニャで法王クレメンス七世によるカール五世の戴冠式のための飾り付けをしていた。

14) R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., p. 590. F. Baldinucci, *Notizie de' professori...*, op. cit. (1688), p. 3.

15) R. Borghini, *Il Riposo*, *ibidem*, p. 590. F. Baldinucci, *Notizie de' professori...*, *ibidem* (1688), p. 3.

16) R. Borghini, *Il Riposo*, *ibidem*, p. 590. F. Baldinucci, *Notizie de' professori...*, *ibidem* (1688), p. 3.

17) フランチェスコ・マリア大公の生前に墓廟が完成していたわけではなかった。アンマナーティがこのウルビーノ滞時に墓廟制作を開始したとしても、大公の後継者グイドバルド二世のもとでアンマナーティが墓廟を仕上げたのは1541-42年のことである。P. Kinney, *Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp. 50-51.

18) G. Vasari, "Girolamo e Bartolomeo Genga e Givambattista San Marino", in *Le vite...*, op. cit. (1568), VI, p. 326.

19) Nagler, Alois Maria, *The Theatre Festivals of the Medici 1539-1637*, New Haven & London, Yale University Press, 1964, pp. 5-6.

20) R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., pp. 590-1. F. Baldinucci, *Notizie de' professori...*, op. cit. (1688), p. 3.

21) P. Kinney, *Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, op. cit., p. 63.

22) 決闘死した者を埋葬することは堅く禁じられていた上に、決闘をした者の家族までもが社会的、宗教的制裁を受けた。マリオ・ナリは決闘死したわけではないが、決闘したこと自体も厳しく非難された。

Del Migliore, Ferdinando Leopoldo, *Firenze città nobilissima illustrata* (Firenze, 1684), Bologna, Forni Editore, 1968, p. 294.

23) Bartoli, Cosimo, *Ragionamenti accademici*, Venezia, 1567, pp. 19-20.

24) Gaye, Giovanni, *Carteggio inedito d'artisti del secolo XIV, XV, XVI*, Tomo III (1^a ed. Firenze, 1840), Torino, Bottega d'Erasmo, 1968, p. 14, N. XVII.

25) Ciardi Dupré, Maria Grazia, "La prima attività dell'Ammannati scultore", *Paragone* n. 135, Firenze, Sansoni Editore, marzo 1961, p. 27.

26) R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., p. 591. F. Baldinucci, *Notizie de' professori...*, op. cit. (1688), p. 3. および Sansovino, Francesco, *Venezia città nobilissima singolare* (Venezia, 1580), Libro VIII, Venezia, Steffano Curti, 1963, p. 310. さらに後の時代のものとしては、Temanza, Tommaso, *Vita di Jacopo Sansovino*, Venezia, 1752, p. 20. を参照。

27) Lotto, Lorenzo, *Il Libro di spese diverse*, a cura di Pietro Zampetti, Venezia-Roma, Istituto per la collaborazione culturale, 1969, p. 132.

28) Venturi, Adolfo, *Storia dell'arte italiana* X-2, Milano, Hoepli Editore Librai della Real Casa, 1936, pp. 371-4; Gabrielli, Annamaria, "Su Bartolomeo Ammannati", *Critica d'Arte* II, 1937, p. 90; Bettini, Sergio, "Note sui soggiorni veneti di Bartolomeo Ammannati", *Le Arti* XIX, Firenze, Casa Editrice Felice le Monnier, 1940, III-fasc. I, p. 20.

29) P. Kinney, *The Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp. 51-52.

30) パドヴァの史料としては、年代順に、Portenari, Angelo, *Della felicità di Padova*, Padova, 1623; Rossetti, Giovambattista, *Discrezione delle pitture, sculture, ed architetture di Padova*, Padova, 1776; Brandolese, Pietro, *Cose più notabili di Padova*, Padova, 1791; Morelli, Iacopo (a cura di), *Notizia d'opere di disegno nella prima metà del secolo XVI*, Bassano, 1800; Moschini, Giannantonio, *Guida per la Città di Padova*, Venezia, 1817.

31) マルコ・マントヴァ・ベナヴィデスという人物は、パドヴァで教鞭をとる一方、法王パウルス二世やピウス四世、神聖ローマ帝国皇帝カール五世、フィレンツェのコジモ・デ・メディチ、ウルビーノ大公グイドバルドら政治的要人と関わりをもち、さらには自らヴェネツィア大使を務めたこともあった。Valsecchi, Antonio, *Elogio di Marco Mantova Benavides*,

- Padova, 1839. および、P. Kinney, *The Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp.114-5.
- 32) R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., p. 591. F. Baldinucci, *Notizie de' professori* ..., op. cit.(1688), pp. 3-4.
- 33) M. Fossi, *La Città*, op. cit., 1970, p. 429.
- 34) Morsolin, Bernardo, *Le collezioni di cose d'arte nel secolo decimo sesto in Vicenza*, Vicenza, 1881; Idem, *Il Museo Gualdo in Vicenza*, Venezia, 1894; および、Bettini, Sergio "Note sui soggiorni veneti di Bartolommeo Ammannati", op. cit., pp. 22-23; P. Kinney, *The Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp. 173-192.
- 35) P. Kinney, *ibidem*, pp. 175-7, p. 223.
- 36) P. Kinney, *ibidem*, pp.194-5, pp. 227-8, p. 230.
- 37) F. Baldinucci, *Notizie de' professori* ..., op. cit.(1688), p. 4.
- 38) G. Vasari, "Battista Franco", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), VI, pp. 583-4. F. Baldinucci, *ibidem*, p. 8.
- 39) R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., p. 591. F. Baldinucci, *ibidem*, p. 9. および、Von Pastor, Ludwig, *History of Popes—From the Close of the Middle Ages* (ed. by Ralph Francis Kerr) vol. XIII, London, Kegan Paul Trench Trubner, 1924, p. 56.
- 40) G. Vasari, "Michelagnolo Buonarroti", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), VII, p. 227; R. Borghini, *ibidem*, p. 591; F. Baldinucci, *ibidem*, pp. 8-9.
- 41) G. Vasari, "Descrizione delle opere di Giorgio Vasari", in *ibidem*, p. 694; R. Borghini, *ibidem*, p. 591; F. Baldinucci, *ibidem*, pp. 8-9.
- 42) G. Vasari, "Iacopo Sansovino", in *ibidem*, pp. 521-522; R. Borghini, *ibidem*, p. 592; F. Baldinucci, *ibidem*, p. 9.
- 43) *Ibidem*.
- 44) *Ibidem*. および、Heikamp, Detlef, "Bartolomeo Ammannati—Il concerto poetico di statue", in *Il concerto di statue*(a cura di Alessandro Vezzosi), Firenze, Aliena Editrice, 1986, pp. 11-48.
- 45) Cellini, Benvenuto, *Vita* (a cura di Ettore Camesasca) II-CVI, Milano, Biblioteca Universale Rizzoli, 1985, p. 637.
- 46) Mellini, Domenico, "Descrizione dell'apparato" (Firenze, 1566), in *Le Vite*..., op. cit. (1568) di G. Vasari, VIII, pp. 508-622.
- 47) G. Gaye, *Carteggio inedito* ..., op. cit., Tomo III, p. 483, N. CCCCLII.
- 48) R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., p. 594; F. Baldinucci, *Notizie de' professori* ..., op. cit.(1688), p. 11; Bocchi, Francesco, *Le Bellezze della città di Fiorenza*(Firenze, 1591), s.l., Gregg International Publishers, 1971, pp. 89-90; Lapini, Agostino, *Diario fiorentino di Agostino Lapini dal 252 al 1586* (1587 c.), Firenze, G. C. Sansoni Editore, 1900, pp. 119-127, pp. 155-9.
- 49) G. Vasari, "Bartolommeo Ammannati(Degli Accademici del Disegno)", in *Le vite*..., op. cit.(1568), VII, pp. 625-6.
- 50) Pirri, Pietro, "L'architetto Bartolomeo Ammannati e i Gesuiti", *Archivum Historicum Societatis Iesu* XII, Roma, 1943, pp. 5-57.
- 51) Ammannati, Bartolomeo, "Lettera agli Accademici del Disegno"(Firenze, 1582), in *Trattato d'arte del Cinquecento* III, a cura di Paola Barocchi, Bari, Gius. La Terza & Figli, 1962, pp. 117-123.
- 52) "Bart. Ammannati al Granduca Ferdinando", in *Carteggio inedito*...(a cura di G. Gaye), op. cit., Tomo III, p. 578, N. CCCCLXI.
- 53) アンマナーティはフィレンツェのイエズス会のサン・ジョヴァンニ・ディ・フィオレンティーニの建設費を自ら負担していた。P. Pirri, "L'architetto Bartolomeo Ammannati e i Gesuiti", op. cit., p. 51.
- 54) Belli Barsali, Isa, "Problemi sulla tarda architettura di Bartolomeo Ammannati: il Palazzo Pubblico di Lucca", *Palladio* (NS) I-II, Roma, Istituto Poligrafico dello Stato, 1960, 1-6, X, pp. 50-68. M. Kiene, *Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp. 170-193.
- 55) ミケランジェロがメディチ家の新聖具室を制作していたのは、1520年から1534年にかけてである。
- 56) G. Vasari, "Michelagnolo Buonarroti", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), VII, p. 192-3.
- 57) Bartolom.° Ammannati, Fabbriche di sua invenzione(Città ideale), Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n° 3397A.
- 58) Bartolomeo Ammannati, in Pacioli Luca, della proporzione ecc., op. cit., n. 120, c. 58v. (M. Fossi, *La Città*, op. cit., 1970, pp. 376-8).
- 59) Giambattista Belluzzi, detto il Sanmarino, *Nuova invenzione di fabrica forteze*, Venezia, 1598. サンマリーノはアンマナーティの友人ジロラモ・ジェンガの娘婿であり、また、アンマナーティはリッカルディアーナのノートの中で、サンマリーノの名前を挙げている。Bartolommeo Ammannati, in Pacioli Luca, della proporzione ecc., op. cit., n. 120, c. 59v. (M. Fossi, *La Città*, op. cit., 1970, p. 380).
- 60) Bartolomeo Ammannati, in Pacioli Luca, della proporzione ecc., op. cit., n. 120, carte 53r-92v. (M. Fossi, *La Città*, op. cit., 1970, pp. 364-423).
- 61) アンマナーティはバドヴァを離れた後にも、イエズス会士がバドヴァを訪れる際にマントヴァ・ベナヴィデスに手紙を書くなど、マントヴァ・ベナヴィデスとの関係は続いていた。G. Gaye, *Carteggio inedito* ..., op. cit., Tomo III (1840), p. 387, N. CCCXXXVII.62; A. Valsecchi, *Elogio di Marco Mantova Benavides*, op. cit.; P. Kinney, *The Early Sculpture of Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp.114-5.
- 62) P. Kinney, *ibidem*, p.150; Kiene, Michael, *Bartolomeo Ammannati*, op. cit., pp. 34-45; Lattanzi, Corrado, "L'attività giovanile di Bartolomeo Ammannati in Veneto", in *Bartolomeo Ammannati scultore e architetto 1511-1592* (a cura di Niccolò Rosselli Del Turco e Federica Salvi), Firenze, Alina Editrice, 1995, pp. 87-94.
- 63) M. Kiene, *ibidem*, p. 35. C. Lattanzi, *ibidem*, p. 88.
- 64) Ammannati, Bartolomeo, "La Villa Giulia—lettera a Marco Mantova Benavides—" (a cura di Francesco e Benvenuto Gasparoni), *Arti e Lettere* vol. II, Roma, Dalla Tipografia Menicanti, 1865, pp. 145-151. および、Fossi, Mazzino, *Bartolomeo Ammannati architetto*, Napoli, Morano Editore, 1967, p. 31.
- 65) G. Vasari, "Descrizione delle opere di Giorgio Vasari", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), VII, p. 694.
- 66) Letarouilly, Paul, *Edifices de Rome moderne—Ou recueil des palais, maisons, eglises couvents, de la ville de Rome*—(1^{me} ed. Paris, 1840), London, Architectural Press, 1982, Pl. 205-206, Pl. 219.
- 67) Bartolom.° Ammannati, Fabbriche di sua invenzione(Città ideale), Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n° 3450A.
- 68) G. Vasari, "Michelagnolo Buonarroti", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), VII, p.224.
- 69) F. Baldinucci, *Notizie de' professori* ..., op. cit.(1688), p. 14.
- 70) Bartolom.° Ammannati, Fabbriche di sua invenzione, op. cit., n° 3418A. パラッツォ・ジュニーにおける計画では、パラッツォの庭園側のファサードの3層目に設けられた3連のアーチによっても、アンマナーティがパラッツォと庭園を一体として考えていた様子が窺われる。
- 71) Mantova Benavides, Andrea, *Inventario delle opere d'arte in Casa Mantova Benavides*, 1695, Biblioteca civica di Padova, ms. 5018 1-2. および、S. Bettini, "Note sui soggiorni veneti di Bartolommeo Ammannati", op. cit., in *Le Arti*, 1940/41, pp. 23-24. と注 30 を参照。
- 72) Gualdo, Girolamo(il giovane), *Giardini di ch' Gualdo*(Vicenza, 1650), a cura di Lionello Puppi, Firenze, Leo S. Olschki Editore, 1972.
- 73) Magrini, Antonio, *Notizie di Girolamo Gualdo, Canonico e Fondatore del Museo Gualdo in Vicenza nel secolo XVI*, Vicenza, 1856; Ciscato, Antonio, *Guida di Vicenza*, Vicenza, 1870.
- 74) A. Magrini, *Notizie di Girolamo Gualdo*, *ibidem*, 1856, p. 11; B. Morsolin, *Il Museo Gualdo in Vicenza*, op. cit., 1894, p. 51.
- 75) A. Mantova Benavides, *Inventario*... (1695), ms. op. cit., p. 27.
- 76) Utens, Giusto, 〈Palazzo Pitti〉, 1599, Firenze, Museo di Firenze com'era.
- 77) 1579年にはフランチェスコ一世とピアンカ・カッペッロの婚礼の祝祭、1589年にはフルディナンド一世とクリスティアーナの婚礼の祝祭、馬上試合やナウマキア(模擬海戦)が催された。
- 78) B. Ammannati, in Pacioli Luca, della proporzione ecc., op. cit., c. 88, c. 90v. (M. Fossi, *La Città*, op. cit., 1970, p. 429, p. 434).
- 79) G. Vasari, "Battista Franco", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), VI, pp. 583-4.
- 80) 注 44 参照。および G. Vasari, "Simone detto Cronaca", in *Le Vite*..., op. cit. (1568), IV, p. 453.
- 81) Mellini, Domenico, "Descrizione dell'apparato"(Firenze, 1566), in *Le Vite*..., op. cit. (1568) di G. Vasari, VIII, pp. 571-580.
- 82) Von Vodoz, Eduard, "Studien zum Architektonischen Werk des Bartolomeo Ammannati", *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, Firenze, August Hopfer Verlag, 1941, p. 54.
- 83) 現在ではシエナのパラッツォ・ピッコロミニに保存されている「ピッケルナの板絵集」のうちの一枚(作者不詳、1561年)、およびフィレンツェ郊外のメディチ家のヴィッラ・ベトライアの中庭の壁に描かれているフレスコ画(Volterrano, 1636-48年)から窺い知ることができる。
- 84) 注 45 参照。Bartolotti, Lando, *Siena*, Roma-Bari, La Terza & Figli, 1982, p. 91; Fagiolo, Marcello, "Effimero e giardino: il teatro della città e il teatro della natura", in AA. VV. *Il potere e lo spazio, La scena del principe*, Milano, Electa, 1980, p. 41.

(2000年7月10日原稿受理, 2000年12月5日採用決定)